

## 二口遺跡発掘調査報告(2)

—町道本田土合線拡幅改良工事に係る発掘調査報告—

1998年3月  
大門町教育委員会



# 序

豊かな自然に恵まれた大門町は、数多くの遺跡が存在します。

しかし、近年の開発事業の増加に伴い、埋蔵文化財の包蔵地が徐々に脅かされていくことがあります。その貴重な文化財を保存できないのであれば、記録という方法で後世に残すことが我々のできるせめてもの責務であると思います。

本書はそういった思いに駆られながら、町道の拡幅工事に際して行った発掘調査の成果をまとめたものであります。この報告書が文化財の保護意識の高揚になれば幸いに思います。

調査の終了に際し、深いご理解を頂いた地元関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

大門町教育委員会

教育長 野上 和雄

# 例 言

- 1 本書は、富山県射水郡大門町に所在する二口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、町道本田土合線拡幅改良工事に伴う第2次本調査である。
- 3 調査期間は1997年11月5日～12月25日（実働17日）。調査面積は845m<sup>2</sup>である。
- 4 調査は大門町教育委員会が実施した。
- 5 調査、及び本書の編集・執筆は大門町教育委員会 主事 尾野寺克実が担当した。
- 6 調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表する。  
安念幹倫・上野章・宇野隆夫・高梨清志・宮田明・宮田進一（敬省略・五十音順）
- 7 発掘調査の作業には（社）大門町シルバー人材センターの御協力を得た。
- 8 遺物整理・報告作成作業の参加者は次のとおりである。  
田中幸生・中谷正和・浅野良治・春名理史・滝沢匡・戸田真美子・柳谷朋子・三浦英俊・廣瀬直樹・  
高橋泰雄・貫井美鈴・山口歎志・五十嵐静代
- 9 掘図中の方位は磁北を指す。
- 10 凡 例  
地山 ■■■

# 目 次

序・例言・目次	2	遺構	3
I 遺跡の位置と環境	1	遺物	6
II 調査に至る経緯と経過	2	(1) 繩文土器	6
1 調査に至る経緯	2	(2) 古墳時代土器	9
2 調査の経過	2	(3) 石器	10
III 調査の概要	3	IV まとめ	10
1 層位	3	参考文献	
		写真図版	

# 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と環境	1	第5図 出土遺物実測図(1)	7
第2図 調査区割付図	2	第6図 出土遺物実測図(2)	8
第3図 基本層序模式図	3	第7図 出土遺物実測図(3)	11
第4図 平面図・遺構断面図	5		

# I 遺跡の位置と環境

大門町は、県の中央北部、射水平野の南西端に位置し、東は小杉町、西・南は高岡市、北は大島町に接している。地形的には、庄川右岸の扇状地と丘陵地からなり、和田川が貫流している。

今回、発掘調査を行った二口遺跡は、縄文時代後晩期に主体をなす遺跡で、庄川右岸の扇状地に位置し、標高6.5m～7.4mで南から北へ向け徐々に低くなる。

二口遺跡が位置する射水平野は、遺跡の集中地となっている。しかし、多数の遺跡の存在が確認されてはいるが、ほとんどが弥生時代後期以降に形成されており、縄文時代に遡るものは稀である。また、大門町に存する他の縄文遺跡は、国史跡串田新遺跡（縄文中期・古墳）、生源寺新遺跡（縄文中期・奈良～中世）、小泉遺跡（縄文前～中期）の3遺跡を確認しているのみである。



第1図 遺跡の位置と環境

- |        |         |         |         |         |         |         |         |
|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1.二口油免 | 2.二口五反田 | 3.本江畠田Ⅰ | 4.本江大坪Ⅰ | 5.棚田    | 6.本江畠田Ⅱ | 7.本江大坪Ⅱ |         |
| 8.本江宮田 | 9.二口    | 10.安吉   | 11.安吉Ⅱ  | 12.本田天水 | 13.本田杉田 | 14.本田宮田 | 15.本田畠田 |

## II 調査に至る経緯と経過

### 1 調査に至る経緯

大門町では、町道本田土合線の道路改良工事を計画、実施した。改良工事は幅員5~6mを拡幅し、新たに歩道を設けて幅員15mにするものである。

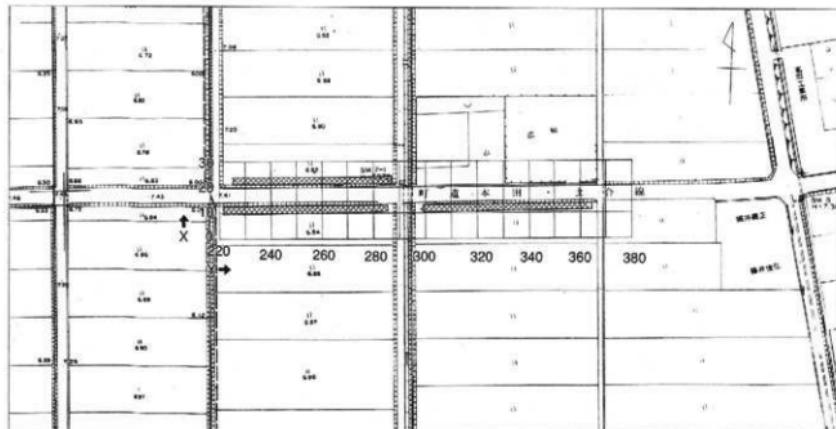
当路線計画地は、富山県農林水産部高岡農地林務事務所が平成4年度より平成8年度まで行った、大門町東部地区県営は場整備事業対象地に含まれる。町教育委員会では、は場整備事業に先立ち、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て、試掘調査を実施してきた。確認した埋蔵文化財包蔵地は、遺構面、及び遺物包含層を傷つけないように計画変更を高岡農地林務事務所に求め、その理解を得て保護してきた。

しかし、町道拡幅部分に、その試掘調査時に確認した埋蔵文化財包蔵地が存在するため、町教育委員会は、町建設課・県教育委員会の3者でその取り扱いについて協議し、工事に先立ち、平成8年度から平成10年度までの3か年計画で本調査を実施することになった。今回調査はその第2次調査である。

### 2 調査の経過（第2図）

平成8年度の第1次調査時に、任意で調査地全体にわたる10×10mのグリッドを組んだ。今年度調査でもそのグリッドを継続使用し、今年度範囲を南北方向にX0~30、東西方向にY220~370とした。

調査対象地は農地、及び町道本田土合線で3分割されているため、便宜上第1地区～第3地区とした。調査面積は845m<sup>2</sup>である。11月5日、重機による表土掘削。11月6日より発掘調査開始。今回調査対象地は旧地形では周囲より若干高くなる地域になり、そのため、先のほ場整備で中世遺構面が削平を受けて消滅しており、縄文時代の遺構面が残るのみであった。1地区から順に遺構検出、及び遺構掘削を行う。地区毎に遺構完掘終了後、土層図、及び平面図を作成する。調査期間は11月5日～12月25日（実働17日）である。



第2図 調査区割付図

### III 調査の概要

#### 1 層位（第3図）

今回調査区の基本層位は、表層から、1層暗褐色土、2層暗黃褐色土、3層黒褐色土、4層白灰色土となる。

1層暗褐色土は水田耕作土で、若干の粘性を持つ。層厚12~18cm。2層暗黃褐色土はほ場整備による盛土である。第2地区・第3地区では水田の下手になり、他のほ場より低くなるため、大区画はほ場整備事業時に盛られたものである。第1地区では上手になるため、盛られていない。層厚0~43cm。3層黒褐色土はほ場整備以前より存する床土である。ほ場整備時の試掘調査で床土直下に遺構の存在を確認したため、田面調整によって削削せずに残していたものである。粘性をもち、主に古墳時代の土器を包含する。層厚13~30cm。4層白灰色土は粘性の強い地山である。遺構はこの層上面より構築される。

今年度調査区は昨年度調査区と谷部を挟んで位置するため、若干基本層位を逆にする。昨年度調査区では地山層にも植物遺体が混じり、低湿地帯の様相を示した。今年度調査区域内においては、それらは遺構内でしか見られず、比較的安定している。

#### 2 遺構

前述のとおり、3地区に分けて調査を行っている。全体に削平を受けており、試掘調査で確認された古墳・中世の遺構面は消失し、若干ではあるが、4層をも削る箇所がある。

以下、地区ごとに概要を記す。

#### 第1地区（第4図上段）

第1地区はX205~242, Y255~287.1に設定した。

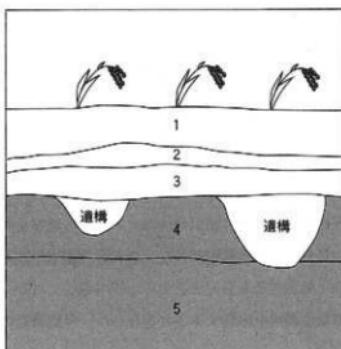
検出できた遺構には溝3条、穴20基がある。

穴の覆土は全て単層で粘質の強い黒色土が入る。出土遺物は全て小破片のため図示・復元しえなかつたが、SP1・SP2・SP3・SP7より縄文土器が、SP4より古墳時代の土師質土器が、SP6より近世陶器が出土している。

**SD1** Y235.3~236.9の間で検出した溝である。幅は95cm前後、最深で18cmを測る。覆土は単層で粘質の強い黒色土が入る。出土遺物は小破片のため図示できなかつたが、縄文土器が認められた。

**SD2** Y239.9~244.1の間で検出した川である。幅は112cm前後、最深で12cmを測る。覆土は単層で粘質が強く、植物遺体の混じる黒色土が入る。出土遺物は小破片のため図示できなかつたが、縄文土器が認められた。第2地区的SD4と同一遺構と思われる。

**SD3** Y281.8~282.3の間で検出した溝である。幅は45cm前後、最深で12cmを測る。覆土は単層で粘質の強い黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。



第3図 基本層序模式図

**中央落ち込み部** Y252.0～278.2まで遺構検出面より35cm前後落ち込み、窪地状になる。地山からは湧水する。覆土は下部に水分・粘質が強く、植物遺体が混じる黄褐色土が堆積し、上部には粘質の強い暗灰色土が入る。下部には縄文土器・石器を多量に包含し、沼地に破損した土器などを廻棄していたものと思われる。

#### 第2地区（第4図中段）

第2地区はX9.6～12.7, Y221.9～285.9に設定した。

検出できた遺構には溝4条がある。

**SD 4** Y239.9～241.1の間で検出した川である。幅は70cm前後、最深で29cmを測る。覆土は単層で粘質が強く、植物遺体の混じる黒色土が入る。第1地区的SD 2と同一遺構と思われる。

**SD 5** Y253.5～240.0の間で検出した溝である。幅は40cm前後、最深で4cmを測る。覆土は単層で粘質の強い黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SD 6** Y268.6～269.2の間で検出した溝である。幅は55cm前後、最深で8cmを測る。覆土は単層で粘質をもつ黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SD 7** Y279.6～280.3の間で検出した溝である。幅は35cm前後、最深で6cmを測る。覆土は単層で粘質をもつ黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### 第3地区（第4図下段）

第3地区はX10.5～13.5, Y299.0～365.9に設定した。

検出できた遺構には溝8条、土坑1基がある。

**SD 8** Y303.8～304.4の間で検出した溝である。幅は20cm前後、最深で4cmを測る。覆土は単層で粘質をもつ黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SD 9** Y304.4～305.3の間で検出した溝である。幅は35cm前後、最深で6cmを測る。覆土は単層で粘質をもつ黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SD10** Y312.0～314.2の間で検出した溝である。幅は43cm前後、最深で12cmを測る。覆土は単層で粘質をもつ黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SD11** Y325.5～328.9の間で検出した溝である。幅は100cm前後、最深で27cmを測る。覆土は単層で粘質の強い黒色土が入る。出土遺物は小破片のため図示できなかつたが、古墳時代の土器片が認められた。

**SD12** Y338.7～342.8の間で検出した溝である。幅は26cm前後、最深で8cmを測り、湾曲しながら南から東北にむけて流れる。覆土は単層で粘質をもつ黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

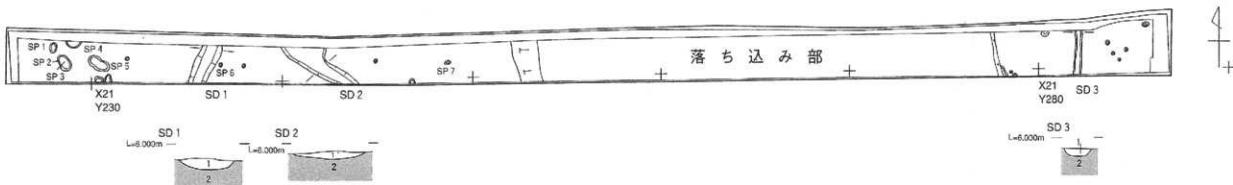
**SD13** Y356.5～357.7の間で検出した溝である。幅は114cm前後、最深で11cmを測る。覆土は単層で粘質の強い黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SD14** Y359.2～359.8の間で検出した溝である。幅は55cm前後、最深で8cmを測る。覆土は単層で粘質をもつ黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

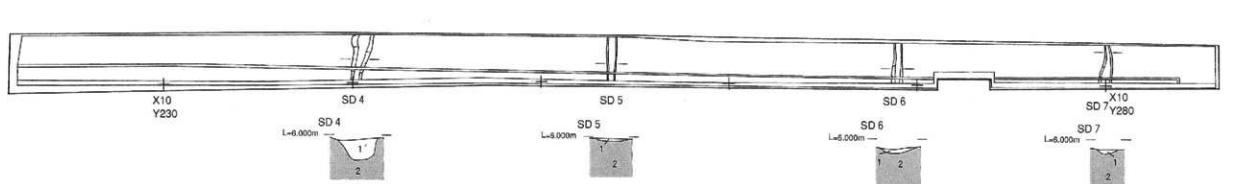
**SD15** Y360.7～361.2の間で検出した溝である。幅は25cm前後、最深で6cmを測る。覆土は単層で粘質をもつ黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SK 1** X12.2以北、Y330.1～332.2の間で検出した遺構。土坑の覆土は単層で、粘質が強く、植物遺体の混じる黒色土が入る。出土遺物はなく、時期は不明である。

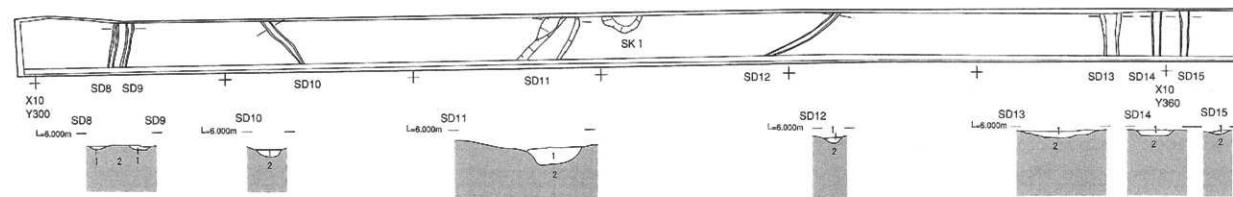
第1地区



第2地区



第3地区



1 黒色粘質土

1' 黒色粘質土（植物遺体混）

2 白灰色粘質土（地山）

第4図 平面図・遺構断面図

### 3 遺物

#### (1) 繩文土器

第Ⅰ地区の落ち込み部から縄文土器が多量に出土した。それらは破片ばかりで庶民されたものと思われる。前述のとおり、遺構からも若干遺物の出土がみられたが、小破片ばかりで図示できるものがない。そこで、ここでは遺跡の主体となる年代を掘むため、落ち込み部出土のものを中心紹介したい。

大洞B式からB-C式後半併行期までを御経塚式、大洞B-C式後半からのC1式併行期までを中屋式、大洞C2式併行期を下野式として時期区分を行つた。

#### 八日市新保式期（第5図）

1は波状口縁深鉢の波頂部である。口縁部に一文字文を施し、寸断文には2本の縦位短沈線を用いる。

#### 中屋式期（第5図）

2は口径約24cmの深鉢の口縁部である。口唇部に斜方向の刻み目を施し、口縁部には2沈線間に押し引き列点文を施す。その下部には鉤手状文を施す。

#### 中屋式期～下野式期（第5図）

3は口径約27cmの椀状の浅鉢の口縁部である。口縁部には1条の沈線を施し、その下部に沈線と交互に段をなす2段の連続列点文を施す。4は口径約30cmの椀状の浅鉢の口縁部である。口縁部には1条の沈線を施し、その下部に沈線と交互に段をなす2段の連続列点文を施す。沈線内は丁寧に研磨する。

#### 下野式期（第5図）

5～13は深鉢である。5は口径約19cmを測る口縁部である。口唇部に斜方向の刻みを施し、口縁部には2沈線間に3段の連続列点文を施す。6は口径約30cmを測る口縁部から頸部で、頸部の括れが弱く、口縁部がほぼ直立する器形である。地文は斜条痕で、口唇部に縦位の刻み目を施し、口縁部には2条の沈線を施す。7は口径約27cmを測る口縁部で、頸部の括れの弱い器形である。地文は横条痕で、頸部は地文を擦り消し無文帶とする。外面には煤が付着している。8は口径約31cmを測る口縁部で、頸部で緩く屈曲し、口縁部はほぼ直立する器形である。地文は横条痕である。9は口縁部から頸部で、頸部の括れの弱い器形である。口縁部に鉤手状文を施し、頸部には2沈線間に連続列点文を施す。10は胴上半部で、胴の張る器形である。地文は縦条痕で、沈線を1条施す。11は頸部である。地文は横条痕で、2沈線間に連続列点文を施す。12は胴部である。地文は横条痕であり、2沈線間に3段の連続列点文を施す。外面には煤が付着している。13は胴上半部である。地文は横条痕で、2沈線間に連続列点文を施す。外面には煤が付着している。

14は口径約20cmの無頸壺の口縁部で、「境A遺跡」の図版242-31に類似した器形である。地文は縄文で、口縁部に沈線を施す。

15は口径約25cmの皿状の浅鉢の口縁部である。口唇部にハの字状の刻みを施し、口縁部内外面に1条の沈線を施す。16～20は椀状の浅鉢である。16は口径約22cmを測る口縁部である。口唇部にハの字状の刻みを施し、口縁部に3条の沈線を施す。17は口径約20cmを測る口縁部である。口唇部に縦位の刻みを施し、口縁部内外面に1条の沈線を施す。18は口径約14cmを測る口縁部である。口縁部に3条の沈線を施し、外面には煤が付着している。19は口径約25cmを測る口縁部である。口縁部に2条の沈線を施し、口縁部内外面には1条の沈線を施す。20は口径約22cmを測る口縁部で、口縁部に2条の沈線を施す。内外面ともに丁寧に研磨し、外面には煤が付着している。

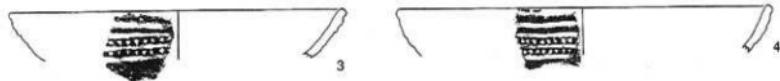
八日市新保式期



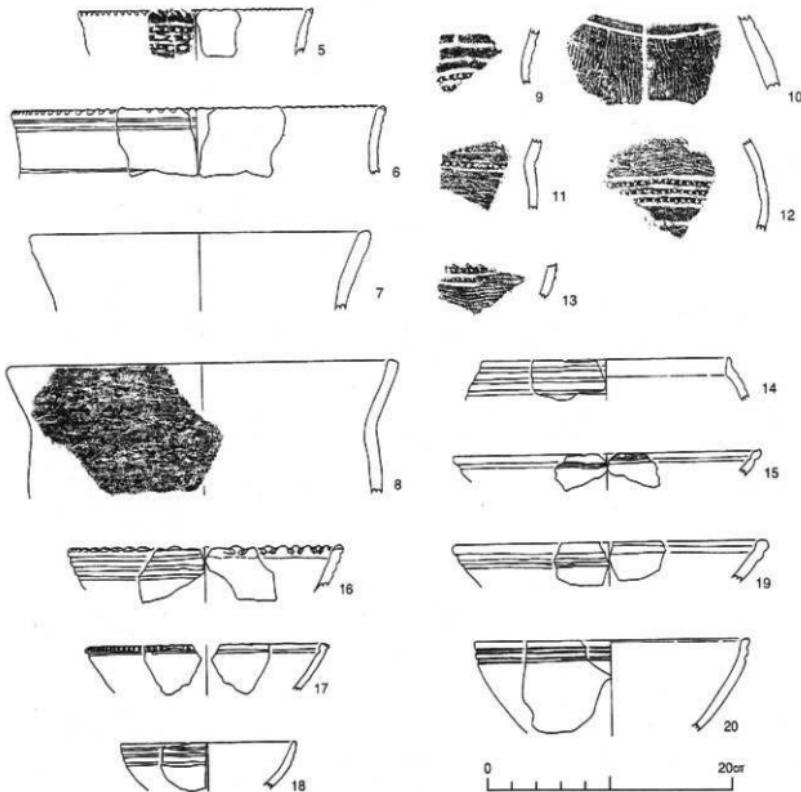
中星式期



中星式期～下野式期

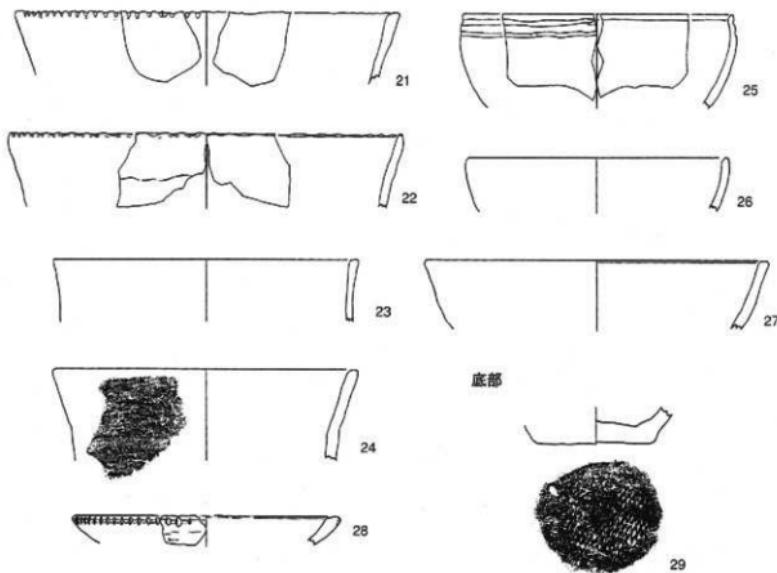


下野式期

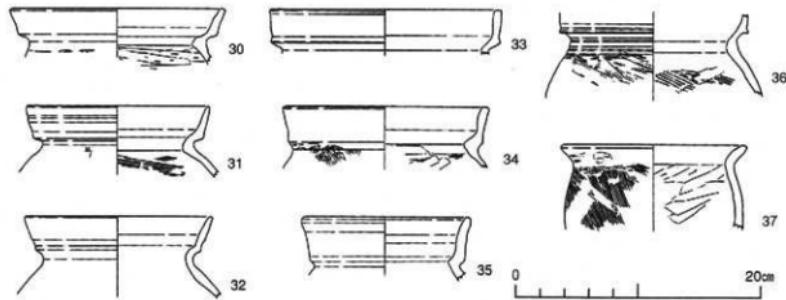


第5図 出土遺物実測図（1）

粗製土器



古墳時代土器



第6図 出土遺物実測図（2）

粗製土器（第6図）

21~24は深鉢である。21は口径約31cmを測る口縁部で、口唇部に縱位の刻み目を施す。22は口径約32cmを測る口縁

部で、頸部の括れの弱い器形である。口唇部には指圧痕を残す。23は口径約25cmを測る口縁部で、頸部の括れの弱い器形である。口唇部には指圧痕を残す。23は口径約25cmを測る口縁部で、頸部の括れが弱く、口縁部はほぼ直立する器形である。24は口径約25cmを測る口縁部で、頸部の括れの弱い器形である。地文は横条痕で、外面には煤が付着している。

25～27は楕状の浅鉢である。25は口径約22cmを測る口縁部で、口縁部に2条の沈線を施す。外面には煤が付着している。26は口径約21cmを測る口縁部である。27は口径約28cmを測る口縁部で、外面には煤が付着している。

28は口径約22cmの皿状の浅鉢の口縁部で、口唇部を面取りし、縦位に刻み目を施す。

#### 底部（第6図）

29は底径約10cmの底部である。平底で、底面よりほぼまっすぐに外側に開く器形である。網代痕の分類は不明である。

#### （2）古墳時代土器（第6図）

古墳時代の土器は遺構内で確認したものは1点しかなく、他は全て3層からの出土である。この状況から、調査区域内における古墳時代の遺構の大半は削平を受け消失しているものと考えられる。しかし、当遺跡内の他地点において、古墳時代の遺構構築面が依存している可能性が高いため、ここで一応の年代の推定を行っておきたい。なお、依存状況が良好で図示したものは菱形土器（以下壺と表記）のみであるが、他に当該期に属するものとして朱彩の壺形土器片等も確認している。

30は有段口縁壺の口縁部から頸部であり、口径16.7cmを測る。口縁部は横位ナデ調整を施し、端部に面取りを施す。また、頸部内面にも斜め方向に工具による強い調整がなされており、明確な面を有している。体部外面はナデ調整を施しており、口縁部接合時の接合痕が残存する。体部内面は削り調整による砂粒の移動が認められた。2次被熱が認められ、外面には煤が付着している。31は有段口縁壺の口縁部から体部上部であり、口径14.8cmを測る。口縁部は横位ナデ調整を施し、端部を丸くおさめる。体部外面の調整もナデ調整を施しているが、1次調整の刷け目が若干残存しており、また体部内面ではハケ目調整のみが施されている。2次被熱が認められ、外面に煤が付着している。32は有段口縁壺の口縁部から体部上半であり、口径15.3cmを測る。内外面共に遺存状況が悪く、調整などは不明である。33は有段口縁壺の口縁部であり、口径18.8cmを測る。口縁部内外面共にナデ調整を施し、端部に面取りを施す。また、外面有段部の稜は比較的明瞭に認められる。2次被熱を被っており、外面に煤が付着している。34は有段口縁壺の体部から頸部であり、口径16.7cmを測る。口縁部はナデ調整が施され、端部に面取りを施す。頸部内面は横方向に工具によるナデ調整が施され、面を有している。体部外面は縦方向の板ナデ調整が認められ、内面も工具によるナデ調整が施されている。2次被熱が認められ、外面に煤が付着している。35は有段口縁壺の口縁部であり、口径14.0cmを測る。ナデ調整を基調とし端部を丸くおさめ、頸部内面には斜め方向に工具による強いナデ調整が明確な面を有している。36は有段口縁壺の有段部から体部上部にかけてある。口縁部や体部の外面は横位ナデ調整を基調とし、有段部は斜め下方向に鋭く突出する。また、体部内面はハケ目調整を施す。37は単純口縁壺の口縁部から体部上半であり、口径14.6cmを測る。口縁部は横位ナデ調整を施すが、指頭圧痕がわずかに確認できる。体部外面はハケ目がみられ、内面は削り調整を施す。また、二次被熱を被っており、外面に煤が付着している。

以上、出土した土器を概観した。前述のようにこれらは包含層出土の土器であり、全てを同一時期とはみなすことにはできないが、古墳時代前期の範疇でとらえよう。

### (3) 石器（第7図）

石器は全て第1地区の落ち込み部より出土しているため、縄文時代のものと考えられる。

38～40は打製石斧である。38は石材は流紋岩で基部は欠損している。残存部中最大長14.6cm、最大幅10.6cm、最大厚3.6cmを測る。39の石材は石英斑岩で基部は欠損している。残存部中最大長12.1cm、最大幅6.8cm、最大厚2.2cmを測る。40の石材は流紋岩で基部は欠損している。残存部中最大長11.0cm、最大幅6.0cm、最大厚3.9cmを測る。

41は磨製石斧である。石材は花崗岩で基部は欠損している。残存部中最大長8.2cm、最大幅5.3cm、最大厚2.4cmを測る。

42は凹石、もしくは叩き石である。石材は砂岩で、欠損しているが、偏平な梢円形円錐を用いていると考えられる。敲打による凹みが多数できている。残存部中最大長5.7cm、最大幅8.4cm、最大厚4.3cmを測る。

43は石皿である。石材は細粒砂岩で、欠損しているが、偏平な梢円形円錐を用いていると考えられる。両面に広い皿部を設けている。残存部中最大長9.3cm、最大幅10.4cm、最大厚4.1cmを測る。

44は石棒、もしくは石刀である。石材は泥岩で、基部は欠損している。頭部は若干のふくらみをもち、無文である。風化が激しいが、敲打のあと、研磨を施したものと思われる。残存部中最大長7.2cm、最大幅3.0cm、最大厚1.5cmを測る。

## IVまとめ

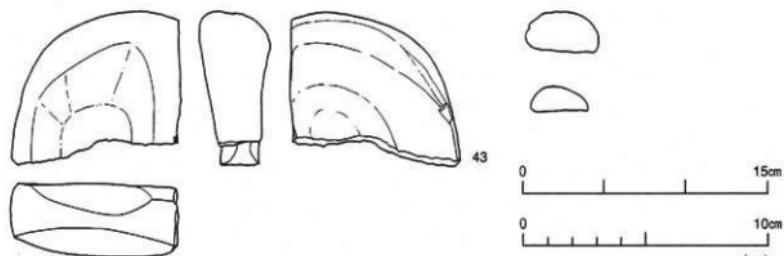
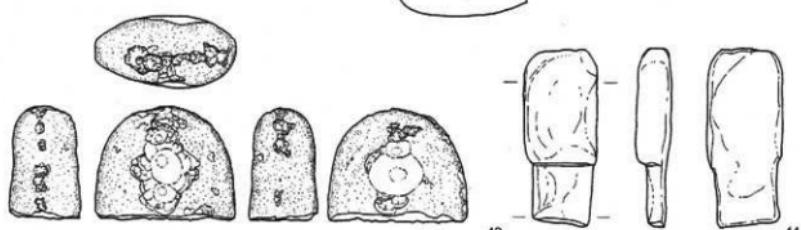
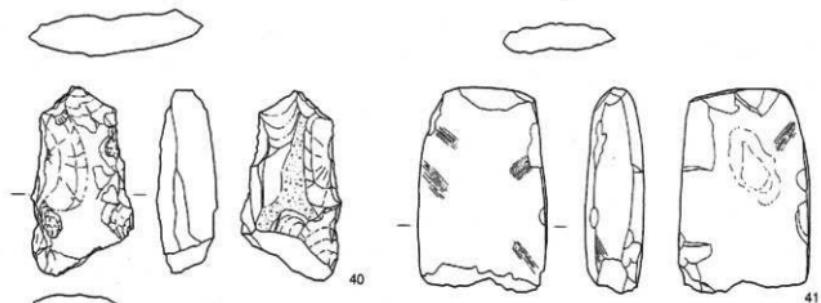
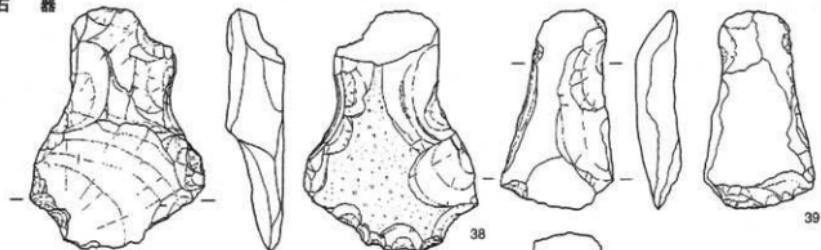
今回の調査では、昨年度に引き続き、縄文時代晩期の遺跡を確認できた。その時期は下野式を中心としたものであるが<sup>5</sup>、調査地は低湿地帯を抜けたばかりの地点で、集落の中心ではないと考えられる。ほ場整備事業の試掘調査結果から当遺跡の縄文時代の集落の中心は調査地の北側になると考えられる。

また、今年度は古墳時代前期の土器が<sup>6</sup>、ほとんどが床土からの出土であるが<sup>7</sup>、多く出土した。当該期のものと考えられる構造も確認していることから、これらは他の場所からの混入物ではなく、この地点に古墳時代の集落が存在していたのであろう。しかし、その本体の所在は現在のところ推定でき得る資料がない。今後の資料の増加を待ちたい。

## 参考文献

- 金沢市教育委員会 1981 「金沢市中屋遺跡」  
金沢市教育委員会 1986 「金沢市新保本町チカモリ遺跡—第4次発掘調査兼土器編」  
酒井重洋 1976 「上市町眼目新丸山A遺跡」「大境」第6号 富山考古学会  
酒井重洋 1987 「井口村井口遺跡出土の縄文晩期の土器」「大境」第10号 富山考古学会  
田嶋明人 1988 「Ⅳ 考察」「漆町遺跡！」 石川県立埋蔵文化財センター  
出崎政子 1969 「北陸地方の縄文時代晩期について」(1)「大境」第3号 富山考古学会  
富山県教育委員会 1991 「北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編6—境A遺跡土器編」  
富山県教育委員会 1992 「北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編7—境A遺跡総括編」  
富山県教育委員会 1992 「北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編8—境A遺跡石器編」  
沼田啓太郎 1956 「旧石川郡安原村中屋遺跡調査報告」「石川考古学研究会会誌」第8号石川考古学研究会  
能登町教育委員会 1986 「真脇遺跡」  
野々市町教育委員会 1983 「野々市町御経塚遺跡」  
谷内尾普司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」「北陸の考古学」石川県考古学研究会  
吉岡康樹 1971 「石川県下野遺跡の研究」「考古学雑誌」第56巻第4号 日本考古学会

石 器



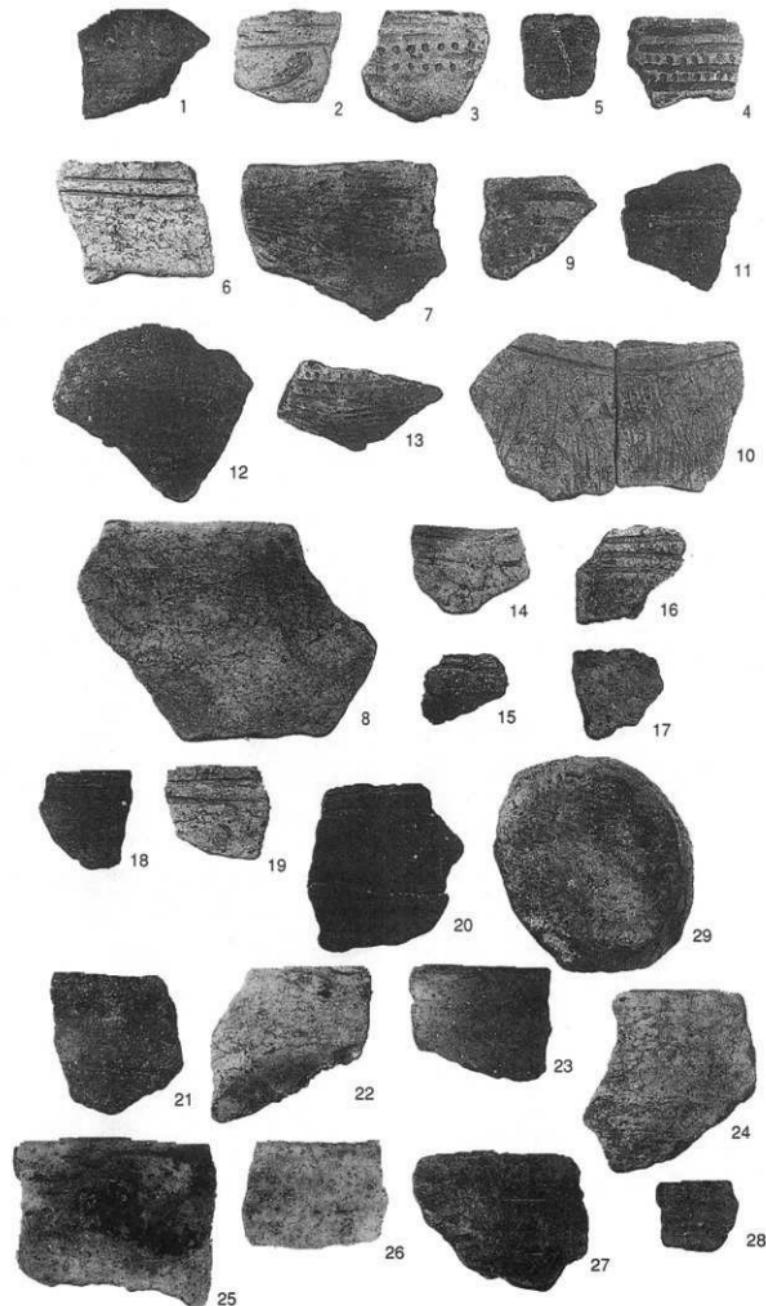
第7図 出土遺物実測図(3)



写真図版1 上段：調査地遠景  
下段左：SD2

中段左：第1トレンチ全景  
下段右：SD12

中段右：第3トレンチ全景



写真図版2 出土遺物 (S=1/2)



30



31



32



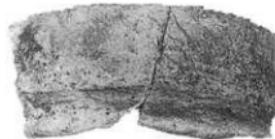
33



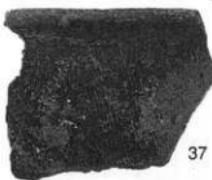
34



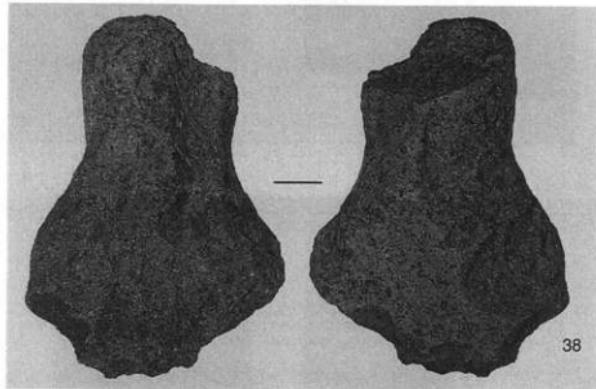
36



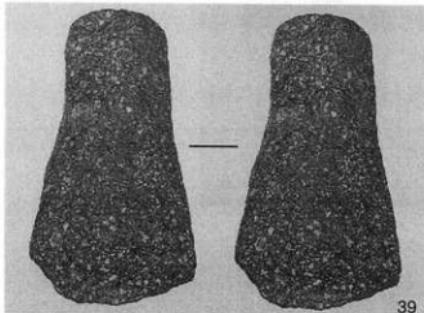
35



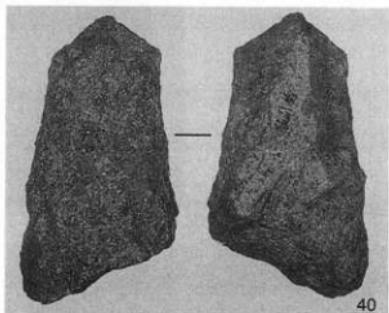
37



38

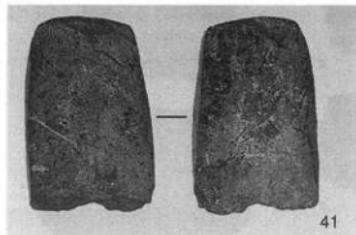


39

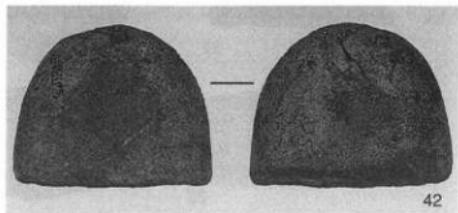


40

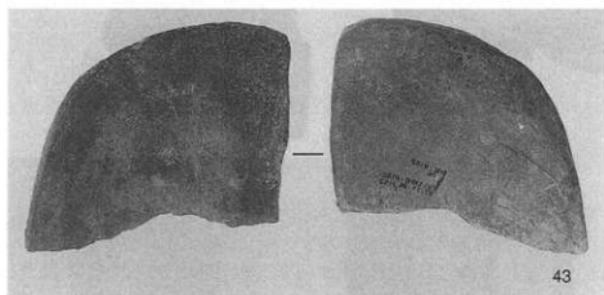
写真図版 3 出土遺物 (S=1/2)



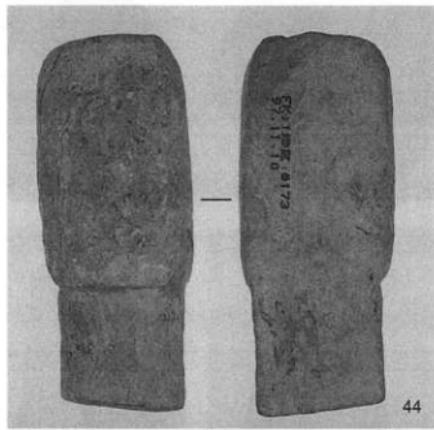
41



42



43



44

写真図版4 出土遺物 (S=1/2・44は S=1/1)

# 報告書抄録

ふりがな	ふたくちいせきはつくつちょうきほうごく ちょうどうほんでんどあいせんかくふくかいりょうこうじにともなうはつくつちょうきほうごく							
書名	二口遺跡発掘調査報告(2) 一町道本田土合線拡幅改良工事に伴う発掘調査報告一							
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	15							
編集者名	尾野寺克実							
編集機関	大門町教育委員会							
所在地	〒939-0294 富山県射水郡大門町二口1081 TEL0766-52-6964							
発行年月日	1998年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
ふた 二 口	だいもんまちふたくち 大門町二口	163821 382002	36°43'13"	137°04'02"	1997.11.05 ~ 1997.12.25	845	町道拡幅 改良工事 に伴う調 査	
所収遺跡名	権別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
二口	集落	縄文時代 晩期		縄文土器 土師質土器 石製品				

大門町埋蔵文化財調査報告第15集

## 二口遺跡発掘調査報告(2)

町道本田土合線拡幅改良工事に伴う発掘調査報告

発行日 平成10年3月

発行 大門町教育委員会

編集 大門町教育委員会

印刷 独立業社高岡

一九九八年三月